



みて！みて！看護

37号

発行日 2017年2月

編集 看護サービス委員会

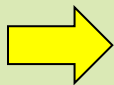
今回、私たちの制服（ユニフォーム）について紹介します。

患者様から“看護師の制服の色は関係あるの？”や“看護師が誰か分からない”などの声が多く聞かれました。看護師の制服の歴史を追って紹介したいと思います。看護師の白衣は、時代の流れや医学的側面から数々の変遷を経て現代のような機能的デザインに発展しました。



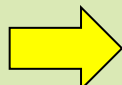
明治32年～42年

白衣の下には冬は黒地、夏は浴衣を着ていました。靴は草履です。



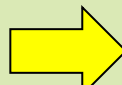
明治42年～昭和3年ごろ

長い白衣は不潔と言われ、床9寸と決められていました。



昭和4年～昭和20年ごろ

詰襟が開襟となりました。靴ができました。



昭和20年～昭和40年代

ほぼ現代の白衣の一般的スタイルとなりました。

ナースキャップは看護師の意識を高めて責任の重さを自覚する意味がありました。

清潔・機能・安全面からH16年からナースキャップは廃止となりました。



白衣姿が患者さんの緊張を呼んでしまい「白衣高血圧症」とよばれる高血圧の原因となることも指摘されてきました。

当院の看護師です♪

手術室の看護師です♪

そこで緊張をほぐし親しみやすいようにH18年から現在のユニホームに変更しました。ユニホームの形の指定はありますが、色は自由に選ぶことができます。



当院でも20種類以上の上下の色を、自分でコーディネートして仕事に臨んでいます。

現在の当院のユニフォームです。堅苦しくなく親しみやすい、その上動作もしやすい。患者様やご家族の方の力になれるよう、頑張ります！！

